

新発田青少年育成市民会議だより

はばたき

21世紀に向かって市民みんなて手をたずさえて



東中学校一年 長谷川 夏美

ふしぎなかお

菅谷小学校 1年

松田 奈緒



かおは、おもしろい。

わらったかあと、

あこったかあと、

ないたかお。

アハハってわらったかおは、

しあわせそう。

プンプンあこったかおは、

こわそう。

シクシクないたかおは、

かなしそう。

わらったかあと、

あこったかあと、

ないたかお。

みんな、わたしのかお。

でも、わたしは、

わらったかおがすき。

わらうと、こころがなんだか

あったかいよ。

発行 新発田青少年育成市民会議
 事務局 新発田市青少年健全育成センター
 住所 新発田市緑町2丁目6番36号
 電話 (0254) 2610897

座談会出席者（敬称略）

- 池田佑太郎 猿橋中学校一年
- 吉田真結子 本丸中学校一年
- 石井 亮太 新発田高校三年
- 花野あゆみ 西新発田高校三年
- 長谷川寿一 川東中学校PTA前会長
- 栗原 禎子 (小・高・専門学校生の三子の父親)
猿橋中学校PTA役員
- 佐分利幸夫 (小・中・高校生三子の母親)
新発田高校教諭 (生徒指導担当)
- コーディネーター 今村由記子 (家庭児童相談員)

コーディネーター いよいよ二〇〇二年の来年から、全ての学校で学校週五日制が実施されます。子供たちが家庭や地域で過ごす時間が本当に多くなりますが、青少年の健全育成に活かしていくためには、どのようにしていったらよいのか考えて参りたいと思います。

まず、広い意味での体験が必要と考えられますが、いろいろな体験を充実させていくにはどうしたらよいでしょうか。

子供の声も生かす

吉田 個人の立場で言わせてもらえば、こういうことをやり

まずと一通りアンケートをとって、どれをやりたいか選択してみたいにして体験させてもらえば、自分の好きなことをやるわけですので、意欲も関心もわくし、充実すると思うんですけど。

石井 地域密着型の受け入れの器として施設とか行事とかを作ってほしいです。そういうものがあつたとしたら働いている親の立場からしても利用したいだろうと思うんです。だって子供をどこへやったらよいか迷うこともあるだろうし、子供も遊ぶ場所はないしやることも明確にすることも明確に

考えられないから、しょうがない家でゲームでもして過ごすというパターンになると思うんで、やはり施設などを増やしてほしいと思います。

花野 今の石井君の意見にほぼ賛成で、青少年の集まる場所がすくなく少ないと思うんですよ。小学生とか中学生のうちは子供会とかかたちで地域の人のふれ合いもあるんですが、高校生となると他の人とふれあう場所が少ないと思うんです。自分たちは、こういう企画でやつた方がいいんじゃないかと絶対に提案できると思うし、考えている人もいると思うので、それをもつと地域づくりに生かしていったらよいと思えます。

石井 僕も問題行動に行きかける部分があるんですよ。なぜかというと自分の行き場所が見いだせなくなるとそつちに行きたくなるという気分があるんですよ。そうなるとう先生を困らせたくてそういう悪いことをしたいなとか思うこともあつて。

僕の場合は親がちゃんと自分のことを見てくれるから何とかなつたんですが、そこで親が見てくれなかつたら

親子の絆をつくる



石井亮太さん



花野あゆみさん



佐分利幸夫さん



コーディネーター
今村由記子さん

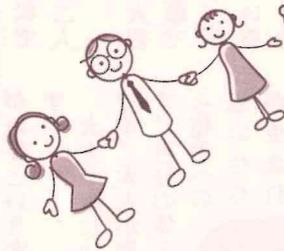


第2弾 ちが輝くために

施に向けて



学校週五日制完全 いきいきと子供が



池田佑太郎さん



吉田真結子さん



長谷川寿一さん



栗原禎子さん

関わりをもつ

そういう悪いことに手を出したかなという気分がほんとにあつて、そういう場を何でもかんでも取り締まってなくすというよりは、子供のわだかまりをなくしてほしいという気分があるんですよ。

栗原 今、石井君が行ったように、お父さんお母さんがしっかりと見てくれたからシグナルを出したときに気づいてくださった。それが「うちはしっかりとるから任せきりよ」となっていた場合、絶対見えない部分だと思ふんです。そうなったときに「気づいたけど遅かったのよ」という声も聞いたことがあります。

コーデイネーター 家庭生活の中での親子の絆というものは、日頃の日常生活の親の姿勢が大事になると思いますね。

池田 僕の家では、お母さんが帰ってきてご飯を作り始めると台所に行って学校であった話をするんですよ。でも親にも話せない、誰にも話せないってことがあるじゃないですか。そういうのは無理に聞き出してほしくないと思います。

栗原 自分で何かやりたいと思つたときに、どうしたらそれがかなえられるか、ちよつと研究してみたり、お家の人に相談、それこそ会話をしたりとか、自分からの投げかけのようなものが必要でないかな。自分の体験ですけれどね。そんなことを感じます。

吉田 今の子供とかは思つてもなかなか行動に出せないことが多いと思うんですよ。少子化が進んでいると思うんです。そういう現状の中で人との関わりを多く持てるようにするにはどうしたらよいでしょうか。

多いと思うんですよ。いけないと思つてもやっちゃうとか、いいことだけどみんながやっていないからできないとか。

だから、無責任な言い方だけど、いけないことはいけないと小さい頃から大人の人にしっかりと教育してもらいたいというか、私ぐらいになるとやつぱり反抗しちゃつて「みんながやるからいいじゃん」みたいなになっちゃううから、小さい頃からいけないことはいけない、良いことはよいと教えてもらった方がありがたいです。

長谷川 はつきり言つて今、年代の格差があまりなくなつてきたんですよ。上下関係をもつとはつきりしておかないといけません。

佐分利 私は生徒指導の立場か

ら同僚職員の方々に関わりを持ちなさいという話をよくいたします。例えば転勤されてこれらの方が「おまえのシャツは何だ」と指導するわけです。生徒は「あなた誰」とこうくるわけです。「おまえ生徒だろ。オレは先生だよ」こういう関わりで指導するわけです。「おまえにされたくないんだよな」こういうわけです。だから関係をまずしっかりと持ちなさいという話を大人にするんです。生徒を細かく見ていて、例えばいい成績を上げたとき「よかつたね」とか「寒かつたがどうやつて学校にきたの」とか、こういうのが一つの会話となつてそのこの関わりができるんですよ。そうなたとき「おまえのシャツは」と注意しても「すみません」といくんです。この関わりをなくすると「ちよつと待つてよ」となるんです。

根本は親の姿勢

栗原 学校に行つたときに先生と生徒がうまくいくというのも掘り下げてみるならば、家庭の中での子供というのかな、親が子供に対して「いいことやつてあげたわね」と声をかけたり、「こんなことをしては駄目よ」と叱つたり、どれだけ親が子供たちをよい方向に向けてあげられるかが根本的な問題だと思います。

花野 今、教師と生徒との信頼関係が少なくなつてきているような気がします。信頼というものはどつちからも心を開かねばならないものだと思うんですよ。信頼しようと思わなければ信頼はできないと思うんです。

長谷川 親が先生を信頼して生徒も先生を信頼できるんじゃないかな。だから、われわれ親がしっかりとしなければいけないのは、本当の話なんです。

コーデイネーター 青少年問題を考えた取り組む際には、大人の視点ばかりでなく青少年の視点も重要だと思つております。

今日は青少年の皆さんの生の声を聞くことができました。子供たちがいきいきと輝くために子供たちを取り巻く全ての人たちが意識改革をしていかなければならない、子供との関わり方を見直していく必要があるのではないかと、今日のお話を伺いましてそういうことをつくづく思いました。今日は貴重なご意見をいただきまして本当にありがとうございます。

青少年の健全育成を願って

青少年健全育成講演会

心に笑顔

を 講師 小柳信子

私が千葉県の児童相談所に勤務していた頃のことです。暴走族とシンナーに夢中の中学二年生のA子が警察に補導され、児童相談所につれてこられました。あつたかいはんを出した時、A子は「先生、こうしてあつたかいはんを食べていたら私、こんなにならなかつたよね。」と言って泣き始めたのです。現在、A子は夫と小六の子どもの平凡で幸せな生活を送っています。そのA子から先日「先生、子どもが口をきかなくなつたの。どうしたらいい？」と電話がきました。私は「お母さんはただ黙って抱きしめてあげる」という対応をアドバイスしました。

私は表現と吸収という人間関係をとても大切にしています。小六の子どもが黙ってしまった―これが表現、そしてお母さんがその悲しみを受け入れた―これが吸収です。この関係がぐるぐるまわることを二人の関係が生きているといえます。

子どもにとつてもおとなにとつても大切なのが「安心感」です。それは誰か信頼できる人が一人でもいるということです。子どもは家族がケンカしたり仲良くしている姿から愛情って一体何だろうということを感じます。自分は本当に愛されているんだなという体験が安心感になります。

子どもたちにぜひ伝えてほしいことに「人の力を借りてほしい。人の力を借りることは恥ずかしいことではなく、勇気のいること」があります。「何でも自分で決めなさい」という前に、子どもが真実困っていたら「何かお母さんに手伝えることある？」と自分の気持ちを子どもにも表現しましょう。子どもはその時、断つたとしても母親の気持ちは心に入っています。

ぜひ、食事を一ヶ月に一回でもいいから家族と一緒に食べてほしいのです。そして子どもを怖がらないでください。子どもが人間として許せない行動をした時に本気で叱れるのは親しかいません。その時、子供は親に愛されていると感じます。でも、殴るなどの体罰は絶対しないでください。子どもは親に対して愛情よりも憎しみを持ちます。

子どもの様子に気付く方法に「あいさつ」があります。子どもの表情（顔や体全体）を見て、「おはよう」「いつてらっしゃい」「お帰らない」とあいさつをしてほしいのです。子どもは自分を見ていてくれる人がいるという安心感を感じ、笑顔になります。

大人が寂しい世の中は子どもも寂しいのです。大人が笑っていると子どもも笑います。自分の体と心を大切にしていることから相手への思いやりが生まれます。それを子どもたちに伝える―表現してほしいのです。



二つの研修会で新発田市の実践を発表

新発田青少年育成市民会議副会長 森田 国昭

県育成協下越研修会

昨年十一月三十日、青少年育成県民会議の研修会が、上・中・下越・佐渡に分かれ、関係者によって行われました。

そこで、下越の部六十名を前に新発田市の実践例について発表いたしました。当新発田市では全世帯を市青少年育成市民会議の構成員として会費をいただき、それに市の補助金を加えて、全市十四小学校区育成協議会に活動資金として配分助成していること、他に各少年団体にも配分して活動してもらっていること、総会では高校生劇の出演があり、好評を得たこと、年二回の会報を通じて市民へのアピールをしていることなど話しました。

また、各小学校区、少年団体の活動の豊富な写真を実物投影機で映写し、参加者の理解を深めることができました。

ほとんどの市町村は役所からの補助金だけの運営で、当然活動も制限される現実や、全戸へのアピール不足も判りました。佐藤県民会議会長から新発田

市では全戸が育成会員であり、全市民の賛同による青少年育成は画期的であると褒められました。

全体会の後で、三部会に分かれて各々のテーマに従って論議を深めました。

山北町研修会

二月十八日、山北町町民会議が開催され、ぜひ新発田市の実状とそれに加えて学校週五日制完全実施に伴う地域での自然体験、文化伝統体験、社会体験等について発表してほしいという要請がありました。

そこで、当市子供会連合会の活動や活動例として住吉町子供会の役割や実践をスライドで映写しました。教育長以下、PTAの若い父母など七十名ほどの参加者がありました。

その後で二つの部会に分かれて、育成町民会議と町子供会の活動、組織、反省点について話し合いがなされました。

これらの研修会の参加を通して、学校週五日制への各町村の取り組みの一端が何われ、大変有意義でした。

有効に使われた特別活動助成金 4地区の活動報告

特別活動助成金の交付を受けた4地区では、地区の特色を生かした活動を実施されました。

子どもの活動では、その自主性や主体性を大切に、楽しさや充実感が得られるよう配慮する必要があります。報告された活動実践にも子どもたちを健やかに育てようとする意欲が感じられます。

二葉地区

標語募集を支えた子供たち

二葉地区青少年育成協議会
前田 一三夫



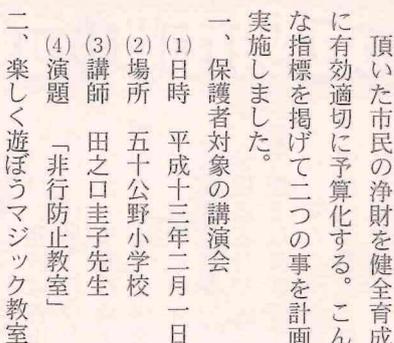
二葉育成協で、「地域」という題で標語の募集をしました。この募集は先ず回覧で地域の皆様に呼びかけ、夏休みの終わり頃、地域の子（小学生高学年）に集めてもらいました。この時、地域の人々と子供達の間にごんごん会話やふれあいがあったのか、私は想像するしかありませんが、今年は二百点を越える応募がありました。応募がなくてもおそらく数百のふれあいや会話があったと思われまふ。子供の足で募集が成り立っているこの事業が、地域の何かのきっかけになればとの願いも込められております。終わりに今年の最優秀賞の標語を掲げます。

温かい親の目の目地域の目
下名柄 渡辺 美穂

五十公野地区

特別活動報告

五十公野地区青少年育成協議会
斎藤 修三



頂いた市民の浄財を健全育成に有効適切に予算化する。こんな指標を掲げて二つの事を計画実施しました。

一、保護者対象の講演会

(1)日時 平成十三年二月一日

(2)場所 五十公野小学校

(3)講師 田之口圭子先生

(4)演題 「非行防止教室」

二、楽しく遊ぼうマジック教室

(1)日時 平成十三年二月六日

(2)場所 五十公野小学校

(3)出演者 新発田マジッククラブの方々

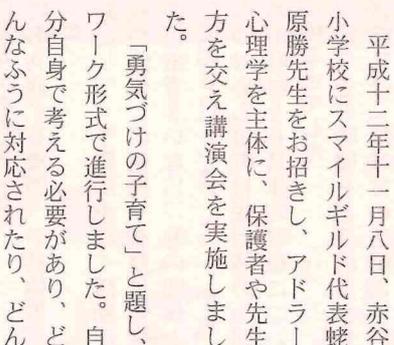
講演は紙芝居を基調として実施され、マジックは低学年に楽しい時間をと、生のマジックに触れさせ、目の前の迫力に子供達は魅了された一時間でした。

講演は紙芝居を基調として実施され、マジックは低学年に楽しい時間をと、生のマジックに触れさせ、目の前の迫力に子供達は魅了された一時間でした。

赤谷地区

子育て講演会開催

赤谷地区青少年育成協議会
石井 淳



平成十二年十一月八日、赤谷小学校にスマイルギルド代表蛸原勝先生をお招きし、アドラー心理学を主体に、保護者や先生方を交え講演会を実施しました。

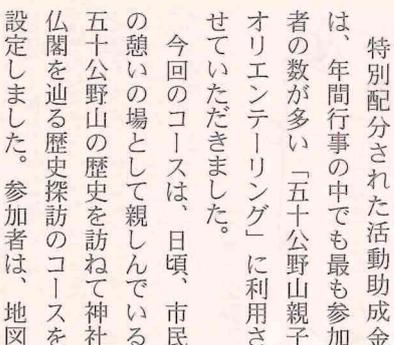
「勇気づけの子育て」と題し、ワーク形式で進行了ました。自分自身で考える必要があり、どんなふうに対応されたり、どんな言葉をかけられると勇気づけられるかを体験しました。「私は、主人から『愛してるよ』と言われた時に、幸せを感じる」とか、「ここに居ていいんだよ」等、本音の発言があり、終始盛り上がりました。現代社会は様々な問題を抱え、子育てをするには難しい環境であり、それは人間関係全般にも言えます。この講演を通じて、豊かな人間関係を築くための知恵を学ぶ事ができました。

平成十二年十一月八日、赤谷小学校にスマイルギルド代表蛸原勝先生をお招きし、アドラー心理学を主体に、保護者や先生方を交え講演会を実施しました。

東豊小学校区

五十公野山の歴史を訪ねて

東豊学区青少年育成協議会
青山 武夫



特別配分された活動助成金は、年間行事の中でも最も参加者の数が多い「五十公野山親子オリエンテーリング」に利用させていただきました。

今回のコースは、日頃、市民の憩いの場として親しんでいる五十公野山の歴史を訪ねて神社仏閣を巡る歴史探訪のコースを設定しました。参加者は、地図を片手に指令書の指示に従い、スタートし、ポイントの神社などでは、それぞれの歴史や言い伝えなどを学んだり、奇問難問クイズに挑戦しながら約二時間、全員無事ゴールイン。地元歴史を知るよい機会となりました。

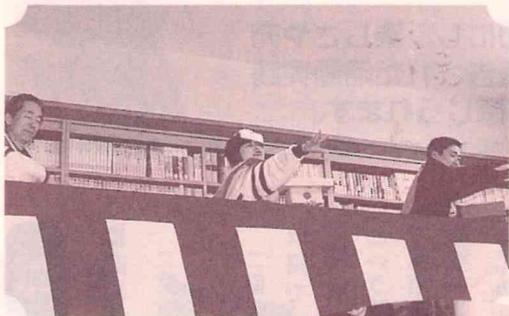
地域での交流が希薄となったといわれて久しい今日、このような活動を通して地域の育成機能が少しでも回復できることを願っております。

特別配分された活動助成金は、年間行事の中でも最も参加者の数が多い「五十公野山親子オリエンテーリング」に利用させていただきました。

とっても楽しかったね センター豆まき大会

センターでは、1月27日（土）ひと足早く「豆まき大会」が行われました。

この日は、豆まきのほかに、パラパラダンス、オニ相撲、ゲームコーナーなどがあり、とっても楽しい時間を過ごしました。



オニギャルと
パラパラダンスタイム
“ミッキー”のパラパ
ラを教えてもらい、全員
で楽しく踊りました。



『オニは外～、
福は内～』豆ま
き、必死に豆ま
を拾って、何個拾
うのができたか
をすらすら。

オニ相撲大会
赤オニ、青オ
ニと元気よく相
撲をとりました。



近隣市町村のとりくみから

二市北蒲青少年育成市町村民会議連絡協議会

(二月九日)

新発田青少年育成市町村民会議 副会長 小倉 和雄

青少年育成市町村民会議が国、県の要請を受けて設立されて約二十年になり、この間に社会は大きく変化し、青少年も顕著な変容をみせています。

こうした実態にどう対応して健全育成の成果を挙げていくかは、これらの活動に関わる機関や団体の大きな課題であります。

標記の連絡協議会は情報交換を行い、各市町村民会議の組織運営や活動内容の見直しを図ろうと、昨年発足しました。

本年度の活動状況の発表の中から、紙面の都合で二つだけを紹介します。

紫雲寺町では運営委員が四部会のいずれかに所属し、部会ごとに事業を企画・実施し、これまでの事務局依存からの自立を図っているとのことでした。

中条町からは「町民会議改革諮問委員会」を設置し、子供の視点から事業を見直し、親世代の若い活動家を役員に登用していきたいとの発表がありました。

二つの発表は各市町村にも共通する課題への具体策だけに、注目されるものでした。

また、事業推進上の課題として、予算が少なく活動が制約される、子供会など他の団体との連携や調整に苦慮する、役員に壮年・若手の後継者がいない、他の団体との共催事業が多い、などが提起されていました。

学校週五日制完全実施への対応も市町村民会議の当面する重要な課題ですが、各市町村とも具体的取組については、これから検討することでした。

学校完全週五日制になったらその時間をどう活用させたいかのアンケートに親の回答は「地域での活動に参加させる」が第一位であったとの報道がありました。

健全育成の基本は家庭であるとしても、少子・核家族の中での触れ合いや体験には限界があり、心豊かでたくましい青少年の育成には学校や家庭の枠を越えた、多様な体験や交流が必要なのではないでしょうか。

当市民会議は関係する団体との連携を図り、子供のための地域活動がさらに充実するよう努めてまいります。

おわりに

毎日の雪に「もうたくさん」と言いたくなるような冬でした。でも、季節は忘れずに大地の下で芽吹き準備をしています。

さて、「はばたき」では、昨年度に引き続いて、二〇〇二年からの「学校週五日制完全実施」に向けて座談会を実施しました。土曜日が休日になるだけ、されど毎週土・日が連休なので、

座談会の終了後、参加者の中学生からポロリと出た本音がとても印象的でした。

「土曜日の休みは家でゴロゴロしていたい。」貴重な休日の主役はあくまでも子供たち。「こんなふうには過ごさせたい。」と願う大人は脇役なのです。彼の一言にハッとさせられた早春の午後の一ときでした。

文責 山野辺

こちら編集部

山野辺 輝子

渋谷 武雄

田中 久美子